序に代えて

一般社団法人倫理研究所倫理文化研究センターは、平成二十七（二〇一五）年九月の発足以来、これまで三回のシンポジウムを開催してきました。

第一回目は「倫理文化研究センター発足記念」として開催し、その内容を『倫理文化研究叢書6　生と死』として刊行しました。また、第二回目は平成三十（二〇一八）年八月に開催され、その内容は『倫理文化研究叢書7　自然と人間』として書籍化されています。

そして、このたびの第三回目のシンポジウムは、令和二（二〇二〇）年十一月六日から七日にかけて行われました。その際の全体テーマは「心と体」。本書『倫理文化研究叢書8　心と体』は、その内容を書籍化したものです。本書には、シンポジウム当日の口頭発表を発展させ論文化したものに、総合討論を付け加えた内容が含まれています。

古来より、心と体との関係については様々な観点から考察や議論がされてきました。その結果として、書籍や論文も多く出版されています。そのような中で、二〇二〇年という年は、私たちの心と体について倫理文化的に再考する良い機会であったと思います。人々がコロナウイルス感染症の世界的蔓延という、未曽有の事象を体験した時期だからです。

コロナウイルス感染症が身体の健康に関係するのは明らかです。他方で、社会において多くの倫理的問題や心に関する問題も引き起こしました。例えば感染した人たちを非難し風評を広める、感染しているかもし

れない人たちに対して差別を行う、感染症の対策に関して自分の考えや意見と違う行動をする人を攻撃する、他者を差し置いて様々な物品を買いあさるなど、いわば「心無い行為」が見られました。

このように、身体の問題が引き金となって、人間の心の底にある非倫理的な部分が露呈してしまった現状において、自分の心と体や他者のそれについてここで再考し、その研究成果について議論する機会を持てたことは、今から考えると幸いであったと思います。本書は、これから私たちが、どのように他者と共存しながら生きていき幸福を目指すのかという、倫理の根本問題についての認識を深める上での一助になればという思いで刊行されています。また、コロナウイルス感染症の世界的流行を経験しながら、個々の研究者が心と体について何を考えたのかの記録としての役割も併せ持っています。

テーマの意義についてのこれ以上の詳細は本書の総合討論に譲るとして、以下では本書の構成と個々の論文内容について簡単に述べておくことにします。本書の第一部には、七名の研究者の論文を掲載してあります。

初めの二つの論文は、個人における心と体を考察したものになっています。一つ目の、松本亜紀による『**丸山敏雄の「無痛安産」観 ―「心」を整えて臨む自然なお産**』は、心と体の深い結びつきを考える上で、倫理研究所の創立者である丸山敏雄が提唱した出産の在り方―無痛安産―に着目し、妊娠・出産を迎えるにあたっての心のあり方について考察しています。

世間では痛くて苦しいのが当たり前とされる出産ですが、丸山敏雄はそれを「不自然」であると喝破しました。そして、ただ痛みや苦しみが無いというだけでなく、例えようのない喜びの中に、玉のような愛児が産まれてくることを「無痛安産」と呼び、「これが普通のお産」であると断言しています。

本稿では、妊婦が平常と変わらない生活を過ごすことの重要性を指摘した丸山敏雄の出産観を紹介しながら、丸山が「無痛安産」を提唱するに至った時代背景と、近代化された現代生活がいかに「無痛安産」を阻んでいるかについて考察を行い、痛みや苦しみが強調される現代に、改めて「無痛安産」の重要性が見直されるべきであると結論付けています。

二つ目の論文は、丸山貴彦による『武道における「心」の進展―青木宏之の「求道心展」思想とその意義』です。日本の芸道文化において目指される境地の一つとして「無」（無心）があります。それは一般的に「とらわれのない心」の状態を意味し、真に心技体の一致を可能にする至高の境地として希求され続けています。

ところが本論文によると、「天真体道」の創始者である青木宏之は、そのような「無」を長い間にわたって経験した後に、その境地を抜け出し、その先に新たな心境があることを体験し、開拓してきました。それだけでなく、そのような心の進展プロセスを、禅の「十牛図」を参考としながら自らの体験に基づく独自の視点で再構築し、「求道者の心の進展」（求道心展）として提示するに至りました。

これは、「有」から「無」、そして再び「無」から「有」へと転換する心の進展であると言うことができます。これを青木は、武道を基盤とする体技文化として、他者が具体的に体感できるように伝達してきたのです。本論文は、このように「心と体」という不即不離な関係がリアルに現成している状況を記述しており、心身のつながりを改めて深く探究するための有意義な視点と方法を提示しています。

ところで、「心」という言葉は「体」に比べるといくらか抽象的なものですが、それと同様の概念は外国でも見られます。そこで、外国、特に英語圏における「心」と日本のそれとの関係や、日本文化における「心」

の特徴について、丸山敏雄の著書である『万人幸福の栞』（以下、『栞』）を題材として考察したのが、寛ボルテールによる『**「万人幸福の栞」と日本の心 ―Heart・Mind・Spirit**』です。『栞』は正しい生活の送り方を主要なテーマとし、同時に生活の実践の場として日本を念頭に置いているため、「日本の心」を論じるのに適した書籍と言えます。

論文ではまず、『栞』における「心」という言葉の出現率を調べ、それにより一般の文書と比較してその使用頻度が高いことを明らかにしています。また『栞』を翻訳するにあたって、「心・こころ」という言葉がいかに難しい言葉であるかを、これまでの文学作品における翻訳を参照しながら論じています。

また現在、「心」という日本語の英訳として、「heart」、「mind」、「spirit」という三つの異なった単語が使用されていることを述べ、『栞』の中の「心」には、この三つの側面が現れていることを論じながら、「心」の概念に迫っています。それを踏まえて、「日本の心」の理解は、日本という国、また日本文化を理解するために不可欠であると述べています。

引き続く三つの論文では、他者との関係における「心と体」、社会における「心と体」が論じられています。

先ず平良直による『**他者の身体とつながる「心」**』では、私たちの心は、重度の障害や疾病によって心を喪失したかにみえる人たちの身体と、どのようにつながることができるのかという問題意識で執筆されています。

本論文では初めに、重い心の病や先天的な障害を抱えた人の「健康」はいかに有り得るのかが検討されています。そこで重要となるのが、健康概念における「欠けるところのないもの」という、健康の本質的要素

です。そこから身体的な回復が不能となった人々が「欠けるところのないもの」となるためには障害を負った本人だけでなく、その人と関わる私たちの心が重要な役割を果たすことが示されています。

そして、一見疾病によって心を喪失したかにみえる認知症の人、統合失調症、精神の障害を抱える人の心を描写しながら、私たちにはどのような対応が可能なのか、そして、究極的には意識、すなわち心が完全に消失したかにみえる遷延性植物状態患者と私たちとはどのように「つながる」ことができるのかが具体的に問われ、考察されています。

ところで冒頭で述べたように、二〇二〇年はコロナウイルスが世界的に蔓延した時期です。このときに、人々が意識した言葉の一つとして「衛生」が挙げられるでしょう。この衛生という言葉を足掛かりに、コロナウイルス禍における倫理観、すなわち私たちの心を考察したのが、水野雄司による『**緊急事態における倫理観の考察 ―公衆衛生を中心に**』です。本論文は特に、衛生という言葉が相反する二つの意味を内包していることを指摘しています。

ひとつは、近代的価値観や制度としての、翻訳語としての「衛生」です。「衛生」は、西洋の「health」や「sanitary」の訳語として明治時代に導入されました。そしてそれは近代化の過程において、個人の身体・健康を管理することで近代国家形成に大きく寄与したと同時に、近代人にとって持つべき「心」すなわち倫理観を育てるという側面も担っていました。ここで近代化とは、雑多な価値観を科学的・合理的な知見からひとつの価値観にまとめていく過程のことです。

一方で、本来の語源である『荘子』の「衛生」は、善悪是非といった価値観自体を否定する心のあり様で

す。老荘思想では、価値観をすべて天地自然にゆだね、人為的なものとは無縁の世界に至ることを目的としています。

本論文ではこのように、日本語の「衛生」には、科学的・合理的見地からの是非を説く翻訳語としての「衛生」と、そうした作為的価値観からの脱却を説く『荘子』を出自とする「衛生」の二つの側面があることが述べられています。

続く内田智士による『**つながる心と体 ―科学の視点から**』では、「心と体」についての科学的研究を紹介しながら、自分の心と体のつながりや、他者とのつながりについて述べています。

私たちは、いわゆる心身二元論、すなわち自分の心と体は別々のものであるという考え方に大きく影響されています。また現代においては、自分と他者との関係についてなんとなく別々であると考えられており、つながっているとはあまり考えられていません。

本論文では先ず、自分自身の心と体との関係について、これまでに行われてきた科学的な研究のいくつかを概観し、それらは心と体は別々のものではなく、相関があるものであることを示唆していると指摘しています。ただし、それらの研究で扱われている「心」は、私たちの心の一部分にすぎず、その方向での研究で心を扱う限界についても議論をしています。

その後、最近の物理学では物質同士が直接的につながっていることを示す実験が提出されていることを述べ、その点で私たちの体と体、そして心と心がつながっている可能性があること、さらに物質にも自由意志がありうるという意味で、私たちの心の最終的な根拠を体に求めることができることを指摘しています。

最後に倫理研究所が推進する純粋倫理との関わりで「心と体」の問題を論じたのが、高橋徹による『**自我意識と潜在意識 ―われわれの意識の現状と問題点、打開策としての即行**』です。

本論文は、自我意識の表層化や外部化と、潜在意識の深層化や内部化という逆方向の中で私たちが引き裂かれているのではないかという前提のもとで執筆されています。そしてこのアンバランスな意識の働きが現代において多くの問題を生じさせているのではないだろうか、と問いを投げかけています。

論文によると、私たちは表層的な自我意識を「自分」の全体だと勘違いして日々を生きているため、心の深層や身体内部に意識を振り向けることができていません。何が自分を成り立たせているのか、何が社会を成り立たせているのか――このような意識や無意識の階層に無自覚のままでいることが、現代人の特性となっているのです。そしてこの特性が自然界との対立や社会の中での混乱や分断を作り出していると言います。

このような問題を解決するには、私たちの意識の順序を反転させ、潜在意識を主体とした生き方に転換を図らなければならず、そのための実践として、純粋倫理における「即行」があるのではないかと指摘しています。

なおそれぞれの論文は、シンポジウムにおける口頭発表を踏まえて、論考をさらに深化・充実させて執筆されたものです。

第一部の論文集に続くのが、本書第二部の総合討論です。

討論には発表者以外にも、倫理研究所理事長である丸山敏秋、またゲストとして白百合女子大学カトリック教育センター教授の石井雅之氏、東京大学大学院医学系研究科助教の笹川恵美氏、國學院大学大学院経済

学研究科博士後期課程在籍の柏木葉子氏が参加し、有意義な議論がなされました。

討論では、先ず総合司会者の丸山敏秋理事長が「心と体」というテーマの意義を再確認し、各研究者の発表を総括しました。その後、シンポジウム参加者がそれぞれ、『『心と体』というテーマを考察する歴史的および未来的意義」について意見を述べました。その中で、それぞれの研究領域から、「心と体」というテーマについてさらに研究を深めていくためには、どのような課題が考えられるかなどについて議論がなされました。そしてこれらを踏まえ、これから私たちはどのような社会を目指していくべきなのか、という点にも議論が及びました。総合討論をお読みいただければ、第一部の研究論文の理解がより深まるだけでなく、さらに広い視野から「心と体」について考える機会を得られるのではないでしょうか。

最後に、今回の倫理文化研究センターシンポジウムは、「倫理運動創始七十五年記念事業」の一つとして開催されました。そのため本シンポジウムでは「心と体」について、倫理研究所が提唱する「純粋倫理」を意識して論じられている部分も多くあります。純粋倫理は、自分と他者の心と体との関係、特につながりについて述べていると見ることができます。本書が、読者の皆様にとって、自分や他者の心と体を見つめなおす契機となれば幸いに思います。

令和三年四月

一般社団法人　倫理研究所

目次

目次

序に代えて　1

第一部　「心と体」研究発表　15

第一発表　丸山敏雄の「無痛安産」観
——「心」を整えて臨む自然なお産　松本亜紀　16

はじめに
一、『無痛安産の書』の出版経緯
二、「無痛安産」提唱の背景
三、出産の痛みとその意味
結びにかえて——今後の課題

第二発表　武道における「心」の進展
——青木宏之の「求道心展」思想とその意義　丸山貴彦　56

はじめに
一、武道における型と心
二、青木宏之と「心身の0化」
三、「天真体道」における「求道心展」思想
四、体技による「心」の伝承
まとめにかえて

第三発表　『万人幸福の栞』と日本の心
——Heart・Mind・Spirit　寛 ボルテール……96
はじめに
『栞』における「心」というキーワード
夏目漱石『こゝろ』における題名の課題
小泉八雲の『Kokoro』の理解
日本文学のあけぼのにおける「こころ」
日本語の「心」と英語の「heart」
『栞』における日本のこころ
『栞』におけるメタファーとしての「心」
最後に
第四発表　他者の身体とつながる「心」　平良 直……141
はじめに
一、問いの起点
二、関わりによってもたらされる「欠けるところのないもの」への反転
三、心的経験の多様さ
四、認知症患者と心
五、「植物状態患者」といかにつながるか
六、他者の身体とのつながり
結びにかえて

第五発表
緊急事態における倫理観の考察
——公衆衛生を中心に　水野雄司……180
問題の所在——二つの倫理観
第一章　近代と「衛生」
第二章　『荘子』の「衛生」
第三章　儒教の理想像
第四章　荘子の「機心」
結論——二つの「衛生」

第六発表
つながる心と体
——科学の視点から　内田智士……218
はじめに
自然科学とは
科学と「心と体」
様々な階層における心と体
意識が先か肉体が先か
イージー問題とハード問題
つながりをもたらす物理学

第七発表
自我意識と潜在意識
——われわれの意識の現状と問題点、打開策としての即行　高橋徹……257
はじめに——自我の非力さと潜在意識の混乱

一、潜在意識は自我の願望実現をはばむ――興味はあっても資質はないという現況
二、なぜ潜在意識に着目する必要があるのか?
三、自我と潜在意識の現状
四、身体意識とは何か
五、自我から潜在意識へのシフト――根っこを主体とした生き方
六、ウィルヘルム・ライヒの語る「中間層」
七、即行の効果について
結語に代えて

第二部　「心と体」討論

295